

米どころ近江を作った花崗岩

高谷好一（京都大学名誉教授）



三上山から野洲川デルタを望む



孤立峰の典型、三上山

近江は昔から米どころとして有名です。おいしいコメをたくさん生産したからです。米どころという和普通は米の生産地ということですが、近江の場合はそれ以上の、もっと深い意味でも使えそうです。その歴史が米作りを中心に動いてきたし、その社会の基本的な性格が稲作によって作られたという意味でも、この米どころという言葉を使っても良いのではないのでしょうか。

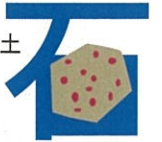
ところでこの米どころ近江は花崗岩系かこうがんけいの岩があったからこそそうだったので。いわゆる花崗岩と、それにもう一つ、花崗岩の仲間の石英斑岩という二つの岩があったからこそそうだったので。

水田地帯を作る花崗岩

多くの花崗岩は簡単に風化し、風化するとマサ（真砂）になります。砂になるのです。湖南の田上山はつい30〜40年前までは禿山はげやまが多く、禿げた尾根には小礫しょうれき混じりの砂が散らばり、山裾にはいっぱい砂がたまっていました。あの砂がマサです。

マサはほとんど粘土分がありません。だから、強い雨にたたかれると簡単に流れだし、川で運ばれて、その川筋に沖積平野を作ります。沖積平野は低平地で水の得やすい所ですから、すぐに水田になります。結局、花崗岩の山があると、その周辺には広い沖積平野が出来、そこには水田地帯が広がることになるのです。ところで、なぜ、花崗岩はマサになりやすいのか。そのことについて少し説明をしておきましょう。

花崗岩は深成岩の一つです。深成岩というのは地下のマグマが深い所でゆっくりと冷え固まったものです。実はこの深成岩は地下の深い所にあつて初めて安定していられる物なのです。何らかの原因、例えば隆起運動などで、その岩体が地表に出て、周りからの重圧が取り去られると、途端にこの岩は自ら膨張し、ひび割れを起こし、バラバラに壊れてしまうのです。金勝山こんせやまあたりでも、花崗岩に同心円状の亀裂が入っているのを時に見かけます。これはタマネギ状風化と言って、膨張した花崗岩がひび割れを起こしている、丁度、タマネギの皮が剥けるような



野洲川と三上山

格好になっていっているのです。こうして、結局はバラバラになり、マサになってしまふのです。

水捌けよく美味しい米が

花崗岩はこうして、水田造成に直接かかわっているのです。そして、この花崗岩地帯で作られた米は特別味が良いという特徴もあります。砂地盤の上に作られた米は水捌けがよく味が良いのです。花崗岩地帯はこうして美味しいコメの出来る水田地帯を作っているのです。米どころ滋賀はまず何よりも花崗岩があったから存在し得たのです。

地域の核を作る石英斑岩

石英斑岩というのはその化学成分は花崗岩とほとんど同じものです。ただ、これは花崗岩と違って半深成岩です。深成岩に比べると、マグマがはるかに浅い所にまで上がって来て、固結した岩です。これは岩になった深さが浅いものですから、その後、地表に露出してきても、花

崗岩のようにマサになることはありません。もともと、低圧で安定した岩だから、地表に出てもしつかりしているのです。

この半深成岩はまた貫入岩などとも呼ばれます。周りの岩の間に岩脈を成して貫入して行くことが多いから、そのようにいわれるのです。この貫入岩はしばしば孤立峰を作ります。孤立峰というのは、それだけがぼつんと孤立した小山です。貫入を受けた周りの岩が浸蝕を受け流亡した後にも、貫入岩だけは屹立して残ることが多く、孤立峰を作るのです。三上山などはその典型です。

三上山をシンボルに

孤立峰は稲作地にとっては地域のシンボル、さらには地域を支える精神的支柱になることが多いのです。その実例を野洲川デルタに見てみましょう。野洲川デルタでは、人々は昔から三上山には火の神様とその娘である川の神が住んでおられると考えてきました。娘神が下さる野洲川の水で稲を作り、父神が教えてくださった竈で、ご飯を炊いて生きていると



琵琶湖側から見た荒神山

考えて来たのです。二柱の神はまた、野洲川デルタを守って下さる守護神でもありません。こうして、野洲川デルタの人はこの山に継りすが付くようにしてずっと

生活し続けて来たのです。

最初の稲作民、すなわち弥生の稲作民が琵琶湖を漕ぎ登ってきた時、彼らはいち早くこの秀峰に目を留め、その麓ふもとに最初の田を開いたに違いありません。これはほとんどの稲作民が持ち続けてきた習性なのです。東南アジアあたりでも、このことは全く同じです。大河を漕ぎ登った稲作民達は必ず秀麗な孤立峰を探し求めて、その下に居を構え、水田を開いたのです。カンボジア辺りではこうした秀峰はプノムといわれます。カンボジアの首都・プノムベンのプノムです。三上山もプノムの一つです。

古墳時代になると野洲川デルタにはたくさんの方が住むようになりました。そしてここには安(野洲)の国が出来たようになりました。三上山の神に奉仕する司祭が地域の首長になり、ここに最初の地域国家が出来上がったのです。孤立峰三上山を守護神と仰ぐ稲作民の国が出来たのです。この時点では石英斑岩の孤立峰とその周辺に広がる、花崗岩マサの水田地帯とのセットは完璧な一つの稲作文化圏を作ったわけです。一説によると、

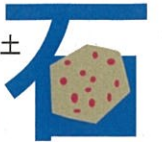
この安の国王の孫が、後に今の天津に移動し、最初の日本の王都、高穴穂たかあなほの宮を作ったというのです。

花崗岩と石英斑岩のセットが作るこの稲作空間が、日本の歴史の中核にあり、最も日本的な社会と風景を作り上げてきたということは紛れの無い事実のようです。その証拠に野洲郡は実に11回も、悠紀齋田きさいでんに選ばれているのです。

悠紀齋田とは天皇の代替わりごとに行われる大嘗祭に使われる稲を作る田のことです。日本中から何十年かに一度、1カ所だけが選ばれるのです。きつと、最も由緒正しく、かつ最も日本的な所が選ばれたに違いありません。因みに、昭和天皇のご即位のときには野洲の衆川くまがわ家の田が選ばれました。これは三上山の真下にあり、御神神社みかみのすぐ前の国道8号沿いにありますから簡単に訪れることができます。

雪野山 荒神山も

石英斑岩が作る孤立峰が核になって地域が作られたという例は他にも認められ



石英斑岩の島に沖島

ます。三上山のすぐ北にある雪野山にはとても豪華な副葬品を持った古墳が発見されました。これは日野川筋の稲作農民を纏めた首長の墓に違いないと言われています。野洲川と同じような歴史があります。たに違いないのですが、ここでは孤立峰は首長の奥津城(墓)になったわけですが、さらに北行くと荒神山があります。この山頂には古くから竈の神様が祀られて

いました。そして、10年ほど前になって、大きな古墳が発見されました。古墳は規模だけで見ると雪野山のものよりもはるかに大きいものです。これは犬上氏の首長の奥津城である可能性が大きいと言われています。

三上山には弥生の時代から土地の守護神が祀られてきました。雪野山は氏族の首長の奥津城が作られました。荒神山には竈の神と氏族の首長の奥津城の両方が作られました。内容は少しづつ違うのですが、これらの小山が土地の人達にとっては彼等を守ってくれるとても大事な中心であったことには違いありません。石英斑岩の孤立峰が地域を纏める核になっているのです。

花崗岩と石英斑岩が滋賀の稲作地そのものとその社会の基本構造を作っている、ということはどうして見てみると、まず、認めても良いのではないのでしょうか。

石の湖南と木の湖北

以上述べて来た花崗岩と石英斑岩の話は湖南地方の話です。湖南には花崗岩系

の岩が多く、こうした話が出来るのです。これに比べると、湖北には全く違った性格があります。湖北は石よりもむしろ木の卓越する世界です。

木が卓越する理由の一つは、湖北の地質が古生層の堆積岩を中心としているという所からきているのです。堆積岩は花崗岩に比べると風化しにくく、また風化しても粘土質の土壌を作ります。だから、流亡し難く、したがって、あまり大きな平野を作ることがありません。山の多い地区を作るのです。そしてそこが樹木で覆われることになるのです。

こうしたことから、湖南は花崗岩体と水田地帯、そして、所々に点在する石英斑岩の孤立峰があり、それらの組み合わせとということになるのです。一方、湖北は樹木で覆われた山が多いということになります。それと、山に接しては、深くて大きな湖があり、それらの組み合わせとということになるのです。

より正確にいうと、滋賀県全体は石の湖南と、木の湖北、それに真ん中にある湖からなると言うべきかもしれません。これの方が滋賀の特徴はより鮮明に出せ



安曇川沖、沖の白石

るのでしょう。ところでこの3地区はそれぞれに極めて個性豊かな景観と歴史を持っていきます。独自で、個性的でありながら、それでいてお互いに相互補完的な関係にもあり、一つの湖国という纏まりを作っています。滋賀は非常に内容豊かな所だと思えます。

一つ一つに目を凝らすと、色々なものが見えてきます。すでに見たように、湖南は弥生稲作的であり、さらに言えば畿内的なものさえ感じさせます。それに比べると、湖北は縄文的であり、どちらかと言えば越的でもあります。北海に続いていく要素が多いように思えます。湖はまた別です。そこには点在する石英斑岩の島があります。竹生島や沖島、沖の白石などです。そしてそれらはまた、別の遠い所へ想いを馳せさせてくれます。竹生島の弁財天ははるか南海へ想いを馳せさせます。沖島の市杵島姫は宗像神社を経て西海へ想いを馳せさせてくれます。こんなふうな想いを縦横に巡らせることは大変楽しいことです。滋賀は面白い所です。

滋賀を庭園に見たて

最後に、一言、私の夢を述べさせていただけます。滋賀を一つの庭園のようにデザイン出来たら、どんなに楽しいことでしょうか。手前には飛び石と泉水があつて、奥には木で覆われた築山や山がある。そんなふうな滋賀県をデザインするのは。そして、そこには地元の自前の文化と、それから渡って来た外来文明とを学び取れるような仕掛けを作るのです。もし、そんなことが出来たら、どんなに素晴らしいことだろうと、そんなことを考えているのです。きっと、日本中の人達が、日本の成り立ちを学ぶために、この地にやって来るに違いありません。

高谷好一さん

昭和9(1934)年生まれ。昭和42(1967)年から28年間、京都大学東南アジア研究センターに勤める。平成7年(1995)年より滋賀県立大学人間文学部教授。同17(2005)年より聖泉大学教授。専門は地域研究。京都大学名誉教授。著書に「湖国小宇宙 日本は滋賀から始まった」(2008年、サンライズ出版)など多数。